日田市埋蔵文化財調査報告書第82集

郷四郎遺跡 II

2007年

日田市教育委員会

序　　文

この報告書は、当教育委員会が店舗建設工事に先立ち、発掘調査を実施した郷四郎遺跡の調査内容をまとめたものです。

郷四郎遺跡は、弥生時代の多様な副葬品を持つ墳墓群が見つかった吹上遺跡を北に望む沖積地に位置しています。

調査では古墳時代の住居や弥生時代から中世にいたる遺物包含層が確認され、沖積地における集落の立地状況の把握や周辺地において集落の存在が想定されるなど、貴重な成果を得ることができました。

こうした発掘調査の成果をまとめた本書が、今後、文化財の保護や学術研究、地域の歴史を学ぶための教材などとして、ご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にご理解・ご協力いただきましたサンクスジャパン株式会社をはじめとして、土地所有者の方や地元の方、発掘作業に従事いただきました作業員の皆様方に対して、心から厚くお礼申し上げます。

平成19年９月

日田市教育委員会

教育長　合原多賀雄

例　　言

1．本書は、日田市教育委員会が平成18年度に実施した郷四郎遺跡２次の発掘調査報告書である。
2．調査は店舗建設工事に伴い、サンクスジャパン株式会社の委託業務として日田市が受託し、日田市教育委員会が事業主体となり実施した。
3．調査現場での実測・写真撮影は若杉が行い、杉野貴幸（文化財保護課調査補助員）の協力を得た。
4．調査中、甲斐寿義氏（現、大分市立城東中学校教諭）より有益なご指導をいただいた。
5．本書に掲載した遺物実測は若杉が行い、製図は若杉が行った他、中川照美（文化財保護課整理作業員）の協力を得た。
6．遺物写真撮影は雅企画有限会社に委託し、その成果品を使用した。
7．本書に使用した図面中の方位は、磁北で表示している。
8．写真図版に付している番号は挿図番号に対応する。
9．出土遺物及び図面・写真類は日田市理蔵文化財センターにて保管している。
10．本書の執筆・編集は若杉が担当した。

本文目次

Ⅰ　調査に至る経過と組織 …… 1
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 2
Ⅲ　調査の記録 …… 3
Ⅳ　まとめ …… 12

写真図版目次

写真図版１　調査区遠景・Ⅰ、Ⅱ区完掘
写真図版２　竪穴住居、Ⅰ－１・２区
写真図版３　Ⅰ－３区、Ⅱ－１・２区
写真図版４　Ⅱ－２・３区、遺物写真
写真図版５　遺物写真

本文写真目次

写真１　調査風景 …… 2
写真２　Ⅱ区トレンチ遺物出土状況 …… 11

日田市の位置図

挿図目次

第１図　調査区位置図(1/5000) …… 1
第２図　周辺遺跡分布図(1/ 25000) …… 2
第３図　調査区配置図(1/500) …… 3
第４図　Ⅰ区全体図(1/150)及び土層実測図(1/50) …… 4
第５図　１号竪穴住居実測図(1/60)
及びカマド実測図(1/30) …… 5
第６図　１号竪穴住居出土遺物実測図(1/3・1/4) …… 5
第７図　Ⅰ－１区遺物出土状況及び土層実測図(1/40) …… 6
第８図　Ⅰ－２・３区遺物出土状況
及び土層実測図(1/40) …… 6
第９図　Ⅰ区出土遺物実測図(1/3・1/4) …… 7
第10図　Ⅱ区全体図(1/150)及び土層実測図(1/50) …… 8
第11図　Ⅱ区遺物出土状況及び土層実測図(1/40) …… 9
第12図　Ⅱ区出土遺物実測図(1/4・1/3・1/2) …… 10
第13図　Ⅱ区出土遺物及びその他の遺物実測図
(1/6・1/4・1/3・1/2・1/1) …… 11

表　目　次

第１表　出土土器観察表 …… 13

Ⅰ　調査に至る経過と組織

平成18年４月27日付けでサンクスジャパン株式会社より、日田市大字十二町字堀336番地での店舗建設に先立つ事前の照会文書が日田市教育委員会に提出された。開発予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地（日田条里遺跡）に該当し、また予定地の北東側では平成６年に郷四郎遺跡として発掘調査が行われ、弥生時代の包含層や古墳時代から中世に至る溝が確認されていることから、その取り扱いについて協議が必要である旨の文書回答を行った。事業者側からの依頼を受け、試掘調査を行った結果、奈良時代の土師器や須恵器が10数点出土し、良好な包含層の存在が明らかとなったことから、発掘調査が必要であるとの回答を行った。

その後、事業者と協議を行い、建物基礎により掘削を受ける部分をトレンチ状に掘り下げ、さらに２ｍ四方の基礎が深く入る部分を深掘りする方法で調査を実施することとし、平成18年度に発掘調査・整理作業、平成19年度に報告書作成・印刷の２ヵ年に分けて契約を行うことで協定書を結び、５月31日に委託契約を取り交わした。発掘調査は６月７日から７月28日まで、整理作業は８月１日から31日、11月１日～11月29日の間実施し、平成18年度の業務を終了した。

翌平成19年度は、４月13日に委託契約を取り交わし、９月30日までの間、報告書作成・印刷を行った。

調査の経過は以下のとおりである。

６月７日　表土剥ぎ・遺構検出開始

６月９日　遺構検出終了・包含層掘り下げ、写真撮影、実測開始

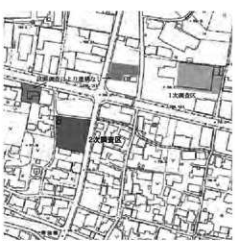
７月10日　竪穴住居を１軒確認

７月14日　清掃後、全体写真撮影

７月26日　器材整理・撤収

７月28日　危険防止のため、調査区の埋め戻しを行い、調査終了

調査終了後の８月１日に日田警察署長宛に埋蔵文化財発見届を提出し、８月17日に埋蔵文化財の認定を受けた。



第１図　調査区位置図（1/5000）

なお、調査関係者は以下のとおりである。

平成18年度（2006）／発掘調査・整理作業

平成19年度（2007）／報告書作成・印刷

調査主体　日田市教育委員会

調査責任者　諫山康雄（日田市教育委員会教育長、～平成19年８月17日）
合原多賀雄（同教育長、平成19年９月27日～）

調査統括　後藤清（日田市教育庁文化財保護課長、平成18年度）
梶原孝史（同文化財保護課長、平成19年度）

調査事務　高倉隆人（日田市教育庁文化財保護課課長補佐兼埋蔵文化財係長、平成18年度）
井上正一郎（同文化財保護課課長補佐兼埋蔵文化財係長、平成19年度）
田中正勝（同専門員）伊藤京子（同専門員）、塚原美保（同主査、平成19年度）
中村邦宏（同主事補、平成18年度）

調査担当　若杉竜太（日田市教育庁文化財保護課主任）

調査員　今田秀樹（日田市教育庁文化財保護課主任、平成19年度・主査）
行時桂子（同主任）、渡邉隆行（同主任：試掘担当）、矢羽田幸宏（同主事）

発掘作業員　五反田静子　後藤美知夫　財津利枝　財津由太　筒井英治　原口勝利　平原知義
行村シヅエ

整理作業員　朝倉眞佐子　石松裕美　井上とし子　鍛冶谷節子　佐藤みちこ　平川優子　安元百合

来訪者　甲斐寿義（大分県教育庁埋蔵文化財センター、平成18年度）

Ⅱ　遺跡の立地と環境

郷四郎遺跡は日田盆地の西部、花月川と庄手川に挟まれた標高75～80mの沖積地上に位置する。遺跡の西約1.5km付近は、花月川・庄手川の他に盆地北西部から流れる二串川が九州最大の河川である筑後川（三隈川）に合流する地点に当たる。

郷四郎遺跡は今回の調査区より北東約150mの地点で過去に１度発掘調査が行われており、弥生時代の包含層と古墳時代から中世にかけての溝が５条確認されている。

遺跡の北側に広がる吹上原台地には、弥生時代前期～終末期の集落や墓地が確認された吹上遺跡が存在する。特に中期後半の甕棺墓や木棺墓には銅剣や鉄剣、貝輪・玉類が副葬されており、当時の首長墓として注目される。また、谷を挟んだ西側の小迫原台地では縄文時代の可能性がある陥し穴状遺構や早期の土器などが確認された朝日ヶ丘遺跡がある。吹上原台地とその南側を流れる花月川との間の狭い沖積地には弥生時代～古代にかけての集落が確認された今泉遺跡、その背後の崖面には北友田横穴墓群が展開する。また、花月川を挟んで今泉遺跡の対岸には、古墳時代中期の鍛冶工房跡や中世の建物群が見つかった荻鶴遺跡が存在する。さらに、荻鶴遺跡の西側には、横穴式石室を主体とする三郎丸古墳や独立丘陵上に40基を超える横穴墓がみられる星隈横穴墓群がある。

郷四郎遺跡より南側の庄手川を挟んだ沖積地上には、弥生時代後期の環濠集落や中世墓が確認された徳瀬遺跡、東側には縄文時代～古墳時代にかけての包含層が確認された瀧ヶ本遺跡が存在する。また、瀧ヶ本遺跡の北側に位置する一丁田遺跡では弥生時代～古墳時代の集落が確認され、古墳時代の竪穴遺構からは鉄鋌が出土している。

以上、郷四郎遺跡周辺の主要な遺跡を概観してきたが、特に近年では市街地が広がる沖積地での調査例が増加していることが特徴として挙げられる。

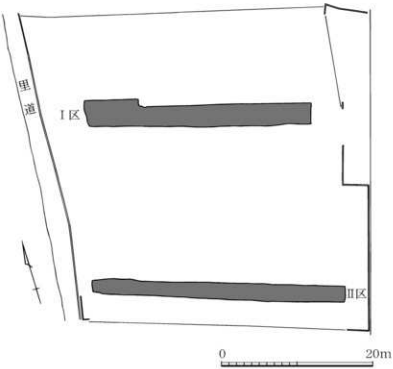
(主要参考文献)
松下桂子編『郷四郎遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第10集　日田市教育委員会　1996
土居和幸編『吹上Ⅰ』日田市埋蔵文化財調査報告書第42集　日田市教育委員会　2003ほか
五十川雄也編『朝日ヶ丘遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第18集　日田市教育委員会　2000
渡邊隆行編『今泉遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第37集　日田市教育委員会　2002
行時志郎編『荻鶴遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第９集　日田市教育委員会　1995
吉田博嗣編『徳瀬遺跡3次』日田市埋蔵文化財調査報告書第22集　日田市教育委員会　2000
土居和幸編『徳瀬遺跡Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書第71集　日田市教育委員会　2006
矢羽田幸宏編『瀧ヶ本遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第80集　日田市教育委員会　2007
渡邊隆行他編『一丁田遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第68集　日田市教育委員会　2006

第２図　周辺遺跡分布図（1/25000）

Ⅲ　調査の内容

(1)　調査の概要（第３図）

調査では、まずアスファルトの除去を行い、試掘調査で確認された現地表下約20㎝の遺物包含層上面まで掘り下げた。その後、遺構検出を行ったが、遺構は確認されなかったことから、コンクリート基礎で掘削を受ける部分に一辺約2.2mの深掘り区を設定し、土層の確認を行いながら、10㎝前後ずつ掘り下げを行った。なお、深掘り区７ヶ所中６ヶ所は、以前の建物基礎による撹乱を受けており、掘り下げ面積は予定より大幅に減少した。なお、深掘り区はⅠ・Ⅱ区ともに東側から１区・２区・３区としている。（例：Ⅰ－１区、Ⅱ－２区）



第３図　調査区位置図（1/500）

また、Ⅰ区は当初４つの区を設定していたが、４区において竪穴住居が確認され、調査方法を変更したことから、上層の出土状況は全体図のみに記し、個別の出土状況・土層の実測図は載せていない。

写真１　調査風景

調査区の土層堆積状況は、現地表下約20㎝の厚さで、以前の建物の基礎となるクラッシャーランや瓦礫が含まれる層が見られた。その下には10～20㎝の厚さで水田層、その下層に70～80㎝の厚さで砂質の遺物包含層が堆積していた。最下層は粗い砂と拳大の礫から成る層で、基本的にはこの面までの掘り下げを行った。

(2)　遺構と遺物

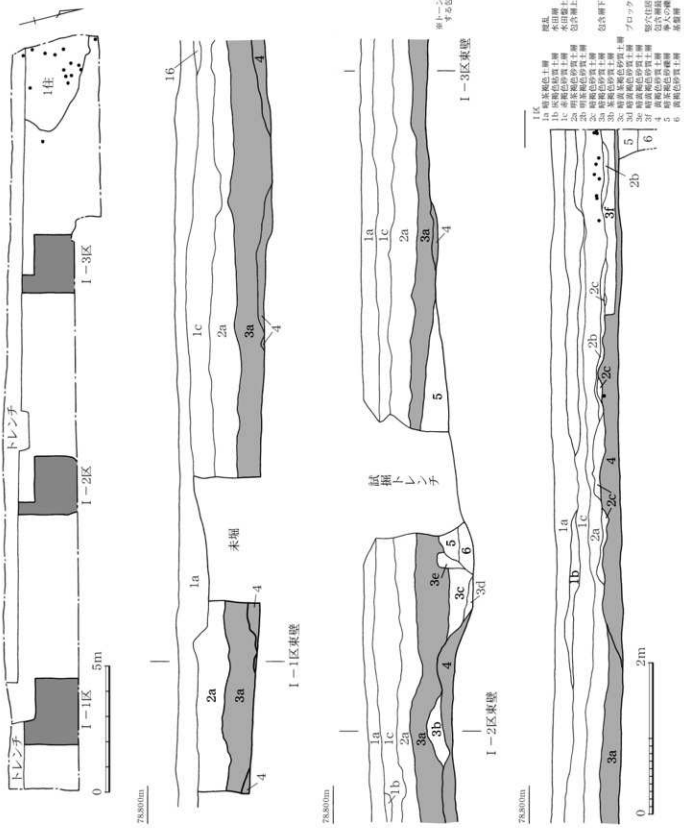
１．Ⅰ区（図版１～３）

基本土層（第４図）

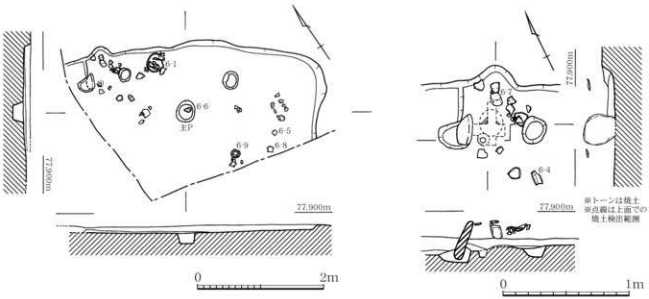
Ⅰ区の土層は、基本的に２a層、３a層、４層の３枚の包含層からなり、何れも砂質である。その下層には基盤となる砂礫層が見られる。４層は調査区中央付近で西側へ落ち込むが、これに対応するように５・６層が西側から中央付近へ向かって徐々に高まり、東側へ落ち込んでいることから、浅い溝状を呈していたと思われる。また、竪穴住居が確認された検出面は４層上面である。

１号竪穴住居（第５図　図版２）

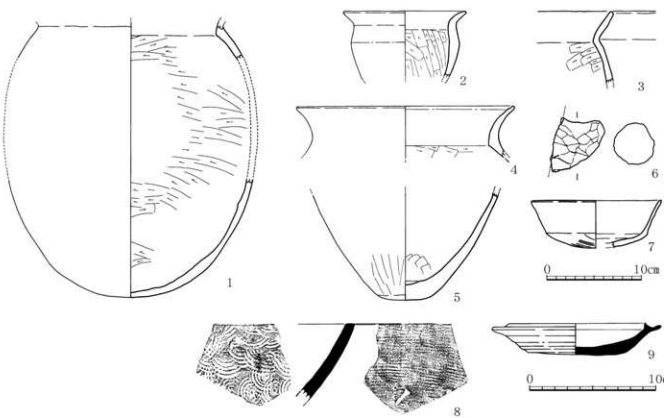
Ⅰ区西端で確認された。当初、包含層として、掘り下げを行っており、焼土や抜き取られたとみられる支脚が確認されたことで、住居が存在することがわかったため、上面は掘り過ぎたと考えられる。調査区内で確認された住居の規模は約4.1m＋α×約2.4m＋αで、検出面からの床面までの深さは約10㎝である。主柱穴とみられるピットは住居の北東壁より約１m、南東壁より約２mの地点で確認され、床面からの深さは約20㎝である。カマドは北西側に付設されていたが、これが北東壁の中央に付設されていたと仮定すれば、



第４図　Ⅰ区全体図（1/150）及び土層実測図（1/50）



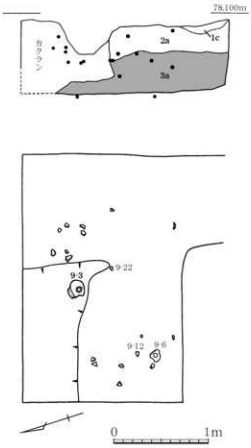
第５図　１号竪穴住居実測図（1/60）及びカマド実測図（1/30）



第６図　１号竪穴住居出土遺物実測図（1～8：1/4、9：1/3）

カマドの主軸線上から東壁までは約3.4mとなり、住居の規模は南東－北西方向が約6.8mと推定できる。

カマドは、方形状に外に張り出すタイプである。袖は右側が壊されるとともに袖石は抜かれていたが、左側の袖及び袖石は確認された。また、支脚に利用したとみられる石材が確認できたが、奥壁近くに床面より浮いた状態で検出された。支脚の抜取り痕と見られるピットが左側の袖石寄りで確認された。袖間の幅は約40cm、袖から奥壁までの距離は約50cmである。遺物は土師器高坏・甕などが出土している。



第７図　Ⅰ－１区遺物出土状況及び土層実測図（1/40）

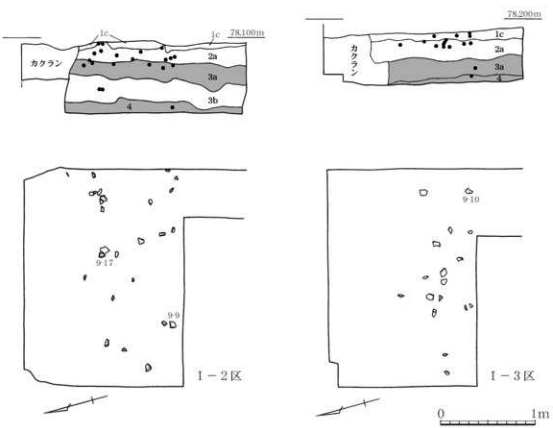
出土遺物（第６図　図版４　第１表）

１～５は土師器甕である。１は胴部内面にケズリが施される。２は口縁部内面、及び外面はケズリ後ナデが施される。胴部内面は縦方向のケズリが見られる。６は甑の把手である。主柱穴の埋土中より出土した。７は高坏の坏部である。口縁部は外反し、端部を丸く仕上げる。８は須恵器の鉢か。外面は格子目タタキの後にナデ、内面は同心円タタキが施される。９は須恵器坏身である。坏部は浅く、底面は平らに仕上げている。外面は回転ヘラケズリ後、回転ナデ、内面は回転ナデ・不整方向ナデが施される。回転ヘラケズリは底面近くまで見られる。

包含層出土遺物（第７～９図　第１表　図版４・５）

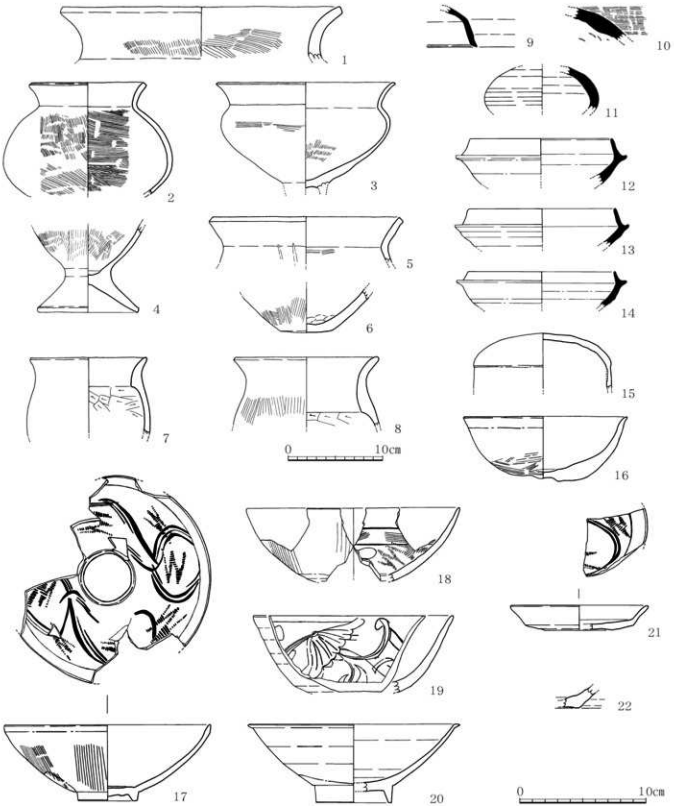
ここではⅠ区の包含層からの出土遺物をみていくが、出土位置・層位等に関わらず、時代順に説明を加えていく。詳細は、第１表を参照されたい。

１、２、５、６は弥生土器甕である。２は胴部が大きく横に張るタイプの小型甕である。３は弥生土器高坏である。４は弥生土器脚付甕である。７、８は土師器甕である。９は須恵器坏蓋である。口縁端部の内面には段を有する。10は須恵器壺か？外面にはカキ目

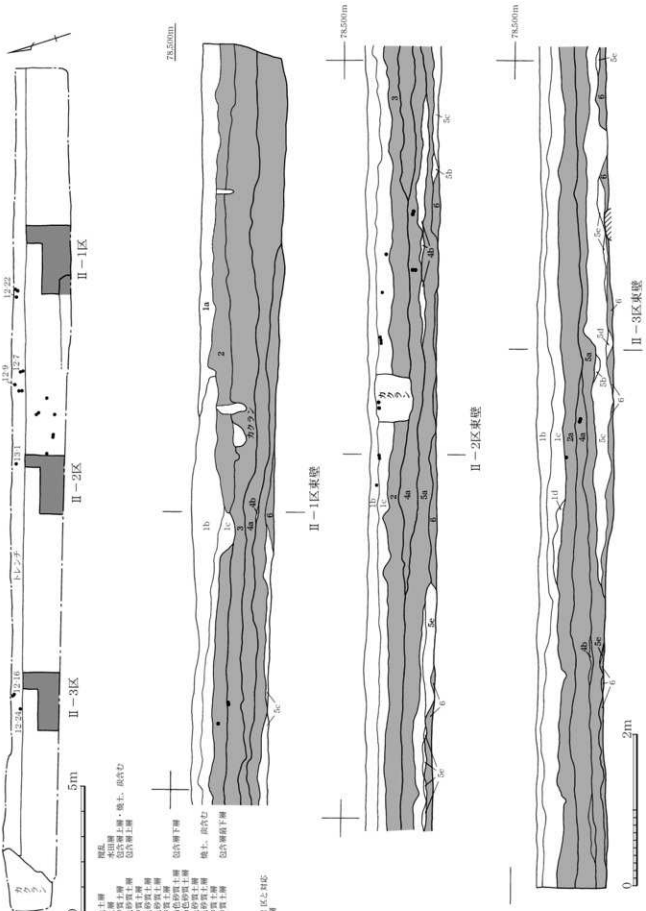


第８図　Ⅰ－２・３区遺物出土状況及び土層実測図（1/40）

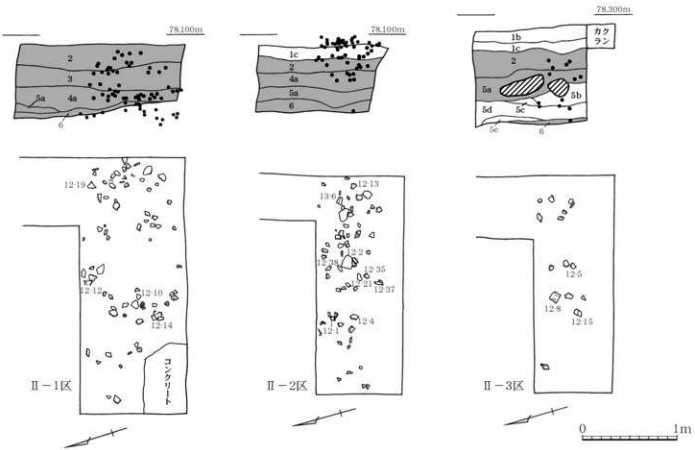
が施される。11は須恵器甕の体部か？ 12 ～ 14は須恵器坏身である。12・13は口縁部が高いのに対し、14は低く、厚く造られている。15は須恵器模倣土師器蓋である。口縁部と天井部の境に段を有し、口縁部は直線的に作られている。16は土師器坏である。底部付近にはハケが見られる。17、18は同安窯系の青磁碗で、ともに外面には細かい櫛目文を施す。また、17は内面に花文・点描文を施し、底部及び高台付近は露胎している。18の内面には花文・点描文の他に櫛目文も見られる。19は龍泉窯系の青磁碗である。内面に



第９図　Ⅰ区出土遺物実測図（1～8：1/4、9～22：1/3）



第10図　Ⅱ区全体図（1/150）及び土層実測図（1/50）



第11図　Ⅱ区遺物出土状況及び土層実測図（1/40）

は蓮華文・葉文が施される。底部付近は肉厚である。20は白磁碗である。口縁端部は嘴状に仕上げる。底部・高台付近は露胎している。21は同安窯系青磁皿である。底面を露胎させ、内面見込みには花文・点描文が施される。22は土師質土器坏もしくは小皿である。底面は糸切りである。

2．Ⅱ区（図版1・3・4）

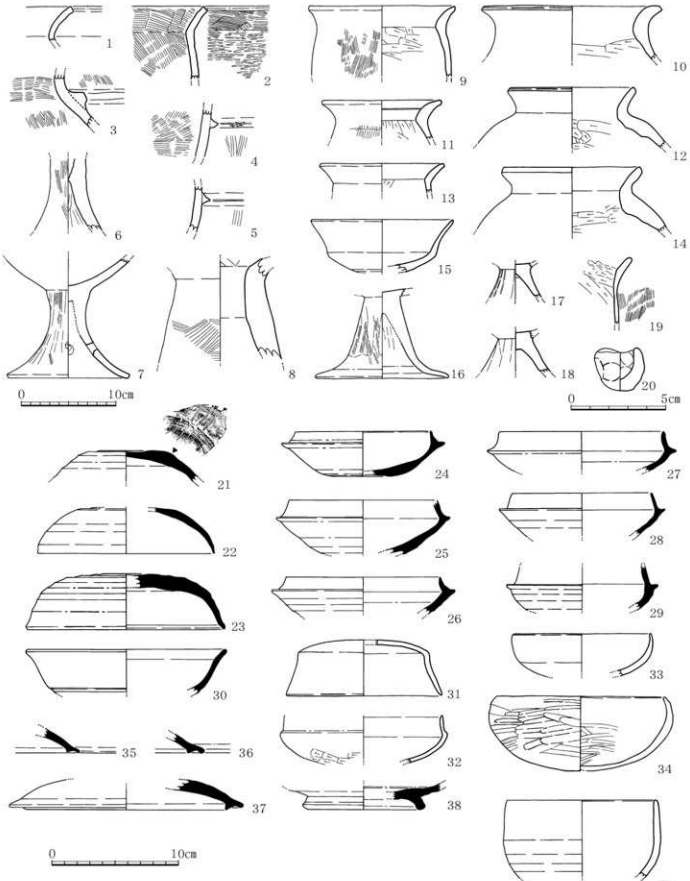
基本土層（第10図）

Ⅱ区の土層は、基本的に1c層以下が包含層となり、3～5a層、6層がそれぞれⅠ区の3a層、4層に対応する。また、6層の下層に礫層がみられ、この層がⅠ区の6層に対応すると考えられる。Ⅰ区で見られた溝状の落ち込みは確認されず、5a層が中央付近において、東西方向より、若干高くなっていることが観察できた。

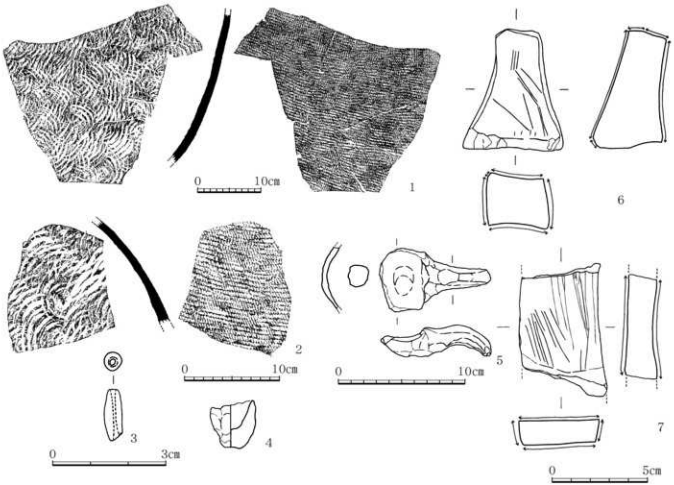
包含層出土遺物（第10～13図　第1表　図版5）

Ⅱ区出土の遺物についてもⅠ区同様に時代順に説明を行っていく。

第12図1・2は弥生土器甕である。3・4は断面台形の突帯、5は断面三角形の突帯を貼付する。6は弥生土器支脚もしくは高坏である。7は弥生土器高坏である。脚部には穿孔が施される。8は弥生土器器台である。外面にはハケが施される。9～14は土師器甕である。11は口縁部内面に沈線が1条施される。15～18は土師器高坏である。15は口縁部が大きく外反する。19は土師器甑である。20は手捏土器である。21～23は須恵器坏蓋である。21の天井部には「艹艹」形のヘラ記号がみられる。このヘラ記号は小迫墳墓群第4地区5号横穴墓出土の高坏に刻まれたものと類似する[1]。23は口縁端部がやや外に開き、内面には段を有する。24～29は須恵器坏身である。24・25は底部付近まで回転ヘラケズリを施す。30は須恵器



第12図　Ⅱ区出土遺物実測図（1～19：1/4、20：1/2、20～39：1/3）



第13図　Ⅱ区出土遺物及びその他の遺物実測図（1：1/6、2：1/4、3：1/1、4・6・7：1/2、5：1/3）

写真２　Ⅱ区トレンチ遺物出土状況

鼎か。口縁部は大きく外に開く。31は土師器蓋である。天井部と口縁部の境に明瞭な稜を有する。32は須恵器模倣土師器坏身である。底部付近にはケズリが見られる。33・34は土師器坏である。34は内・外面とも、大部分にススが付着する。35～37は須恵器蓋である。38は須恵器高台付壺である。高台は断面方形を呈し、立ち上がり部分より２cmほど内側に付くとみられる。39は青磁碗である。口縁部は直線的に立ち上がる。

第13図１・２は須恵器甕である。いずれも外面に格子目タタキ、内面に同心円タタキを施す。５は甑形土製品である。色調は淡褐色を呈する。把手部分は湾曲し、一部にススが付着する。残存長8.9cm、高さ2.5cmである。Ⅱ－２区５a層出土。６・７は砂岩製砥石である。６は長さ6.2cm、厚さ3.6cm、最大幅5.3cm、重さ133.9gである。７は残存長7.0cm、厚さ1.6cm、幅4.2cm、重さ66.5gで、溝状の擦痕が見られ、鉄器類に使用したものと考えられる。

３．その他の遺物（第13図）

ここで説明を行う遺物は、出土位置が不明のものである。３は土錘である。色調は暗赤褐色を呈し、長さ2.7cm、最大幅0.9cm、孔径0.3cm、重さ1.8gである。４は手捏土器である。

註(1) 小柳和宏編『小迫墳墓群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(3) 大分県教育委員会 1995

Ⅳ　まとめ

今回の調査では、竪穴住居１軒と包含層が確認できたが、最後にまとめとして、これらの形成時期や周辺の状況について、考えてみることにしたい。

まず、１号竪穴住居の時期についてみていく。第６図９の坏身は、坏部が浅く、底面が回転ヘラ切り未調整である点から、陶邑編年TK209と考えられる。また、２の土師器小型壺は口縁部の傾きや胴部最大径、７の土師器高坏は坏部口縁の傾きから、重藤氏の編年で９期にあたり、須恵器坏身と同時期とみられる。１や３の土師器甕は胴部や口縁部の形態に若干古い要素が見られるものの、この住居の年代は７世紀初頭～前半の中に収まるとみられるが、後述する包含層の時期と合わせて、のちほど触れることにする。。

包含層出土の遺物については、弥生時代後期後半から見られ、Ⅰ区４層より出土した弥生土器高坏（第９図３）、Ⅱ区６層より出土した弥生土器甕（第12図２）などがこの時期に当たる。一方、新しい時期の遺物はⅠ区２a層より出土した第９図17 ～ 21は同安窯系青磁碗（Ⅰ-1a類）・皿（Ⅰ-2b類）、龍泉窯系青磁碗（Ⅰ-2b類）、白磁碗（Ⅴ-4a類）が出土していることから、12世紀中頃～後半の年代が与えられる（宮崎編2000）。さらに、第９図22の土師質土器小皿（坏）も底面が糸切りであることからも12世紀以降とみていいだろう。また、出土遺物のうち、最も多くみられるのは須恵器蓋坏が陶邑編年MT85 ～ TK43（第９図12 ～ 14・第12図22、24 ～ 29、31 ～ 33）、土師器甕・高坏・椀などが重藤編年の９期のものである（第９図７・８・16、第12図９～18）。

次に出土遺物の時期と出土層位の関係をみると、Ⅰ区２a層が12世紀中頃～後半、３層以下が弥生時代後期後半と６世紀中頃～後半、これに対応して、Ⅱ区２層以下がⅠ区３層以下と同様の時期となる。これらの層中には古い時期の遺物も含まれているが、周辺地からの流れ込みが何回も起こり、その都度、古い時期の遺物が堆積したものと推定できる。以上のことから今回確認された包含層の形成時期は、大きくは前述の２つの時期に分けられるであろう。これらの堆積時期の間にも７世紀中頃以降の遺物が含まれているⅡ区１c層のように、小規模な堆積は起きているとみられる。また、こうした状況から１号竪穴住居は包含層の形成直後に作られるが、７世紀中頃以降は再び堆積がみられることから、この時期に集落が形成されたとしても、この場所での存続期間はそれほど長くなかったと思われる。

最後に、今回の調査区と周辺の地形について考えてみたい。竪穴住居が確認されたⅠ区４層の上面レベルは、Ⅰ区東側において、約77.4mであるのに対し、住居がある西側では約77.9mと約50cm高くなっている。また、Ⅰ区４層に対応するⅡ区６層の上面レベルは約77.3mである。竪穴住居の検出面から床面までの深さが浅いことから上面は削平を受けていることを考えても、調査区内において、地形は南東から北西に向かって徐々に高くなっていることが窺える。また、Ⅰ区の土層観察から、中央付近で谷状の浅い落ち込みがあることがわかり、狭い範囲の中でも細かい地形の起伏があったと考えられる。

一方、今回の調査の後、調査区の北約120m、西約110mの２地点で試掘調査が行われたが（第１図）、遺構等は確認されずに、最下層では砂層が検出された。この砂層のレベルは北側の調査区で約77.1m、西側の調査区で約77.0mであり、住居が確認された部分より約0.8 ～ 0.9m低くなっている。さらに１次調査区での古墳時代が上限とみられる溝の掘り込み面のレベルは約76.9mである。こうしたことから、郷四郎遺跡全体で見た場合、東から西へ向かって、徐々に高くなり、住居が確認された付近で最高点に達し、また低くなっていく地形であったと考えられる。こうした状況から、今回確認された包含層の遺物は遺跡東側において、長期間にわたり存在した集落からの流れ込みと想定される。

(参考文献) 田辺昭三『陶邑古窯址群』研究論集10　平安学園考古クラブ 1966／重藤輝行「仁右衛門畑遺跡を中心とした浮羽群の古墳時代土師器編年」吉田東明編『仁右衛門畑遺跡』Ⅰ　浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第12集　福岡県教育委員会　2000／宮崎亮一編『太宰府条坊』XV－陶磁器分類編－太宰府の文化財第49集　太宰府市教育委員会 2000ほか

第1表　出土土器観察表

遺構番号	写真図版番号	調査区	遺構又は層序	種別	器種	法量（上段：口径　中段：胴部最大径　下段：底径）口径	胴部最大径	底径	器高	調整 外面	調整 内面	胎土 粗砂	胎土 中砂	胎土 細砂	胎土 雲母	胎土 赤彩	焼成	色調 外面	色調 内面	備考
第6図1	4	I	1層	土師器	甕	-	(26.8)	-	(28.1)	ハケ・ナデ	ケズリ・ナデ	○	○		○	○	良好	暗茶褐色	暗褐色	焼成値19.5cm
第6図2	4	I	1層	土師器	甕	(13.0)	(10.4)	-	7.2	ケズリ・ナデ	ケズリ・ナデ	○	○		○		良好	暗赤褐色	暗茶褐色	スス付着
第6図3	4	I	1層	土師器	甕	-	-	-	(7.2)	ナデ	ケズリ・ナデ	○	○		○		良好	暗赤褐色	淡赤褐色	外面スス付着
第6図4	4	I	1層	土師器	甕	(22.6)	-	-	(5.9)	ナデ	ケズリ・ナデ	○	○		○		良好	暗褐色	赤褐色	焼成値19.6cm
第6図5	4	I	1層	土師器	甕	-	-	-	-	ケズリ	—	○	○		○		良好	淡赤褐色	一部赤褐色	粒子のみ
第6図6	4	I	1層	土師器	甕	-	-	(6.0)	(11.4)	ケズリ・ナデ	ケズリ・ナデ	○	○				良好	淡赤褐色	暗茶褐色	
第6図7	4	I	1層	土師器	高杯	(13.2)	-	-	(3.0)	ハケ・ナデ	ナデ		○		○	○	やや不良	赤褐色	赤褐色	
第6図8	4	I	1層	須恵器	鉢？	-	-	-	(8.1)	格子目タタキ・ナデ	同心円タタキ・ナデ		○		○		良好	灰褐色	灰褐色	
第6図9	4	I	1層	須恵器	甕	19.4	-	2.7	2.6	回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ・不整方向ナデ		○		○		良好	明灰褐色	明灰褐色	
第6図10		I-1	一括	弥生	甕	(28.2)	-	-	(6.6)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	○	○				良好	淡茶褐色	暗赤褐色	焼成値25.2cm
第6図11		I	(2a層)	弥生	甕	(10.6)	(17.0)	-	(11.0)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		○	○	○	○	良好	淡赤褐色	黒褐色	焼成値10.5cm
第6図12	4	I-1	4層	弥生	高杯	(16.0)	-	-	(11.2)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		○	○	○	○	良好	暗赤褐色	淡赤褐色	二段矢羽状スス付着 焼成値18.8cm
第6図13		I	(2a層)	弥生	甕	-	-	(16.4)	(6.4)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	○	○		○		良好	赤褐色	赤褐色	焼成値4.8cm
第6図14		I	4層	弥生	甕	(19.6)	-	-	(4.6)	ナデ・ハケ	ナデ・ハケ	○	○		○		良好	淡黒褐色	淡褐色	焼成値17.4cm
第6図15		I-1	4層	弥生	甕	-	-	5.6	(4.6)	ハケ・ナデ	指押さえ・ナデ	○	○		○		良好	淡赤褐色	暗黒灰褐色	
第6図16		I	4層	土師器	甕	(12.2)	(13.2)	-	(8.3)	ハケ・ナデ	ケズリ・ナデ	○	○		○		良好	暗赤褐色	暗褐色	焼成値13.3cm
第6図17		I	3a層	土師器	甕	(14.8)	-	-	(7.4)	ハケ・ナデ	ケズリ・ナデ	○	○		○		良好	暗茶褐色	黒褐色	焼成値12.7cm
第6図18		I-1	2a層	須恵器	杯蓋	-	-	-	(3.2)	回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ		○	○		○	良好	灰褐色	灰褐色	
第6図19		I-1	2a層	須恵器	壺？	-	-	-	(2.6)	方格目	ナデ		○		○		良好	灰白色	灰白色	
第6図11		I	2a層	須恵器	鐘	-	(9.1)	-	(3.2)	回転ヘラケズリ	回転ナデ		○		○	○	良好	灰赤褐色	灰赤褐色	
第6図12		I-1	3a層	須恵器	杯身	(11.2)	-	-	(3.6)	回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ		○			○	良好	暗灰褐色	明灰褐色	
第6図13		I	(2a層)	須恵器	杯身	(13.6)	-	-	(3.0)	回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ		○	○		○	良好	黒灰褐色	灰白色	表を被せて焼成か
第6図14		I	3a層	須恵器	杯身	(11.6)	-	-	(2.9)	回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ		○		○	○	良好	黒灰褐色	黒灰褐色	
第6図15		I	3a層	土師器	鉢	-	-	-	(4.5)	回転ヘラケズリ・ナデ	回転ナデ・ナデ		○	○		○	やや不良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第6図16	4	I	3a層	土師器	鍋	13.1	-	-	5.2	ハケ・ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	良好	黒褐色	黒褐色	
第6図17	4	I-2	(2a層)	青磁	碗	(16.4)	-	4.8	6.1	櫛目文	花文・面圧文		—			—	良好	淡緑色	淡緑色	同定窯系　一括遺物
第6図18		I	トレンチ	青磁	碗	(17.1)	-	-	(3.9)	櫛目文	櫛目文・面圧文		—			—	良好	淡緑色	淡緑色	同定窯系　一括遺物
第6図19	5	I	2a層	青磁	碗	(16.0)	-	-	(6.1)	—	蓮弁文・雷文		—			—	良好	暗緑色	暗緑色	龍泉窯系
第6図20	5	I	(2a層)	白磁	碗	(17.0)	-	(6.0)	(6.0)	—	—		—			—	良好	乳白色	乳白色	一括遺物
第6図21	5	I	(2a層)	青磁	皿	(11.0)	-	(5.4)	2.0	—	花文・面圧文		—			—	良好	淡緑色	淡緑色	同定窯系
第6図22		I-1	(2a層)	須恵器	杯	-	-	-	(1.2)	ナデ	ナデ	○	○			○	良好	暗赤褐色	暗赤褐色	底面糸切り
第7図1		II-2	(4a層)	弥生	甕	-	-	-	(3.2)	ナデ	ナデ		○		○	○	良好	黒白色	黒白色	
第7図2		II	(3a層)	弥生	甕	-	-	-	(2.4)	タタキ・ハケ	ハケ・ナデ	○	○		○	○	良好	暗茶褐色	褐色	外面スス付着
第7図3		II	3層	弥生	壺	-	-	-	(5.8)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		○	○	○	○	やや不良	淡黒茶褐色	淡黒茶褐色	
第7図4		II-2	6層	弥生	壺	-	-	-	(3.2)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	○	○		○		良好	赤黒褐色	褐色	受部に切り目
第7図5		II-3	5a層	弥生	壺	-	-	-	(3.0)	ハケ・ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	良好	暗茶褐色	暗褐色	
第7図6		II	16層	弥生	支脚	-	-	-	(7.2)	ハケ・ナデ	ケズリ	○	○		○	○	良好	明黒褐色	明黒褐色	
第7図7	5	II	4a層	弥生	高杯	-	-	(13.0)	(12.7)	ケズリ・ナデ	ナデ	○	○		○		良好	赤茶褐色	赤茶褐色	
第7図8	5	II-3	5層	弥生	器台	-	-	-	(11.0)	ハケ・ナデ	指押さえ・ナデ	○	○		○		良好	暗赤褐色	暗赤褐色	焼成値9.4cm
第7図9		II	4a層	土師器	甕	(15.2)	(14.2)	-	(4.6)	ハケ・ナデ	ケズリ・ナデ	○	○				良好	暗赤褐色	暗赤褐色	
第7図10		II-3	6層	土師器	甕	(16.6)	-	-	(3.7)	ナデ	ナデ・ケズリ		○	○	○	○	良好	黒褐色	暗赤褐色	
第7図11		II-3	5a層	土師器	甕	(12.0)	-	-	(4.2)	ハケ・ナデ	ケズリ・ナデ	○	○		○		良好	暗褐色	暗赤褐色	外面スス付着, 焼成値10.6cm
第7図12		II-3	6層	土師器	甕	(13.0)	-	-	(6.0)	ナデ	ケズリ・ナデ	○	○	○	○	○	良好	暗赤褐色	暗赤褐色	焼成値10.0cm
第7図13		II-2	4a層	土師器	甕	(13.0)	-	-	(3.2)	ナデ	ケズリ・ナデ	○	○	○	○	○	良好	淡黒茶褐色	淡黒茶褐色	焼成値10.2cm
第7図14	5	II-3	6層	土師器	甕	(14.2)	-	-	(7.0)	ナデ	ケズリ・ナデ	○	○	○		○	良好	暗茶褐色	暗茶褐色	焼成値7.7, 内面に一次スス付着 焼成値12.0cm
第7図15		II-3	(4a層)	土師器	高杯	(15.0)	-	-	(3.6)	ナデ	ナデ	○	○		○	○	やや不良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第7図16	5	II	4a層	土師器	高杯	-	-	(14.3)	(6.2)	ケズリ・ナデ	ケズリ・ナデ	○	○		○		良好	淡赤褐色	淡赤褐色	
第7図17		II	トレンチ	土師器	高杯	-	-	-	(3.7)	ケズリ	ナデ		○		○		不良	褐色	褐色	焼成値3.2cm
第7図18		II	トレンチ	土師器	高杯	-	-	-	(4.4)	ケズリ	ナデ		○	○	○		不良	暗褐色	暗褐色	焼成値3.6cm
第7図19		II-1	4a層	土師器	鉢	-	-	-	(7.2)	ハケ・ナデ	ケズリ・ナデ	○	○				良好	淡赤褐色	暗赤褐色	
第7図20	5	II-3	一括	子持土器	ミミ	-	-	-	2.3	指押さえ	指押さえ	○	○	○		○	良好	赤褐色	赤褐色	
第7図21	5	II-2	2層	須恵器	杯蓋	-	-	-	(3.2)	回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ		○		○		良好	暗灰褐色	暗灰褐色	ヘラ記号, 天井値6.8cm
第7図22		II	2層	須恵器	杯蓋	(14.1)	-	-	(3.2)	回転ヘラケズリ	回転ナデ		○		○		良好	灰黒色	灰褐色	外面自然釉付着, 内面に気泡
第7図23	5	II	(3層)	須恵器	杯蓋	(15.8)	-	-	4.3	回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ		○		○	○	良好	灰褐色	灰褐色	
第7図24	5	II	2層	須恵器	杯身	(10.8)	-	(6.6)	3.6	回転ヘラケズリ	回転ナデ		○	○		○	良好	灰白色	灰白色	
第7図25		II	(2a層)	須恵器	杯身	(10.8)	-	-	(4.5)	回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ・不整方向ナデ		○		○	○	やや不良	灰白色	灰白色	
第7図26		II	(2層)	須恵器	杯身	(12.4)	-	-	(3.1)	回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ		○			○	良好	灰褐色	灰褐色	焼成値黒色, 表を被せて焼成か
第7図27		II	トレンチ	須恵器	杯身	(13.0)	-	-	(3.2)	回転ナデ	回転ナデ		○		○	○	良好	暗灰褐色	暗灰褐色	
第7図28		II	トレンチ	須恵器	杯身	(13.2)	-	-	(3.2)	回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ		○	○		○	良好	灰白色	灰白色	
第7図29		II	一括	須恵器	杯身	-	-	-	(4.2)	回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ		○		○	○	良好	灰褐色	灰褐色	
第7図30		II	一括	須恵器	鐘	(15.0)	-	-	(6.2)	回転ナデ	回転ナデ		○	○	○	○	良好	灰黒色	内面に自然釉	
第7図31	5	II	(3a層)	土師器	鉢	(12.2)	-	-	4.3	ナデ	ナデ		○	○		○	良好	暗赤褐色	暗赤褐色	天井値12.0cm
第7図32	5	II	(3a層)	土師器	鍋	(12.6)	-	-	(3.6)	ナデ・ケズリ	ナデ		○	○		○	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	一括スス付着
第7図33		II	(3a層)	土師器	鍋	(13.0)	-	-	(3.4)	ナデ	ヘラケズリ・ナデ		○		○	○	良好	赤褐色	赤褐色	
第7図34		II-3	16層	土師器	鍋	(13.6)	-	-	6.0	ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ	○	○				良好	暗赤褐色	暗赤褐色	
第7図35		II-2	3a層	須恵器	鉢	-	-	-	(2.0)	回転ナデ	回転ナデ		○	○	○		良好	灰黒色	灰黒色	
第7図36		II	一括	須恵器	鉢	-	-	-	(1.2)	回転ヘラケズリ・ナデ	回転ナデ		○	○		○	良好	灰褐色	灰褐色	
第7図37	5	II-2	3a層	須恵器	鉢	(16.0)	-	-	(3.4)	回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ		○	○		○	良好	赤茶褐色	赤茶褐色	
第7図38		II-2	3a層	須恵器	甕	-	-	-	(2.1)	回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ		○		○	○	良好	灰褐色	灰褐色	
第7図39		II	トレンチ	青磁	碗	(12.0)	-	-	(6.3)	—	—						良好	淡緑色	淡緑色	
第7図41		II	トレンチ	須恵器	壺	-	-	-	(23.8)	格子目タタキ	同心円タタキ		○			○	良好	灰白色	灰白色	
第7図42		II-2	3a層	須恵器	壺	-	-	-	(10.2)	格子目タタキ	同心円タタキ		○		○	○	良好	黒灰褐色	黒灰褐色	
第7図43			一括	子持土器	ミミ	2.2	-	6.9	2.6	指押さえ	指押さえ	○	○	○		○	不良	赤褐色	赤褐色	

※（ ）付きの数値はレベルから推定

写真図版 1

調査区遠景（北から）

Ⅰ区全景（東から）

Ⅱ区全景（東から）

１号竪穴住居（南から）

１号竪穴住居遺物出土状況

１号竪穴住居遺物出土状況

１号竪穴住居カマド発掘状況

Ⅰ－１区遺物出土状況

Ⅰ－１区土層堆積状況

Ⅰ－２区遺物出土状況

Ⅰ－２区土層堆積状況

写真図版３

Ⅰ－３区遺物出土状況

Ⅰ－３区土層堆積状況

Ⅱ－１区遺物出土状況

Ⅱ－１区遺物出土状況

Ⅱ－１区遺物出土状況

Ⅱ－１区土層堆積状況

Ⅱ－２区遺物出土状況

Ⅱ－２区遺物出土状況

Ⅱ－２区土層堆積状況

Ⅱ－３区遺物出土状況

Ⅱ－３区土層堆積状況

Ⅱ区トレンチ遺物出土状況

6-1

6-2

6-6

6-7

6-9

9-17（内面）

9-3

9-16

9-17（側面）

9-19

9-20

9-21

12-7

12-8

12-14

12-16

12-20

12-21

12-23

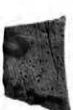
12-24

12-31

12-32

12-37

13-5


13-7

報 告 書 抄 録

ふ り が な	ごうしろういせき
書　　名	郷四郎遺跡Ⅱ
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	82
編 著 者 名	若杉竜太
編 集 機 関	日田市教育庁文化財保護課
所　在　地	〒877-0077　日田市南友田町516-1
発 行 機 関	日田市教育委員会
所　在　地	〒877-8601　日田市田島２-６-１
発行年月日	2007年９月30日

所収遺跡名	所　在　地	コード		北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
郷四郎遺跡	大分県日田市 大字十二町字堀 336	44204-6	651238	33°19′22″	130°59′9″	20060607 ～ 20060728	164㎡	店舗建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主　な　遺　構	主 な 遺 物	特記事項
郷四郎遺跡	集 落 包蔵地	古墳 弥生 ～ 中世	竪穴住居 包含層	土師器・須恵器 弥生土器・石器 土師器・須恵器 青磁・白磁	

郷 四 郎 遺 跡 Ⅱ

日田市埋蔵文化財調査報告書第82集
2007年９月30日

編　集　日田市教育庁文化財保護課
〒877-0077　大分県日田市南友田町516-1
発　行　日田市教育委員会
〒877-8601　大分県日田市田島２-６-１
印　刷　尾花印刷有限会社
〒877-0026　大分県日田市田島本町８-８

日田市

R100 CHAMPIONS SOY INC.